ただいま、令和5年度卒業生のみなさんに、卒業証書をお渡ししました。

3年生のみなさん、卒業、おめでとうございます。

また、保護者のみなさま、本日は、卒業式にご臨席たまわり、感謝申し上げますとともに、お子様の中学校卒業、義務教育の修了をお慶び申し上げます。

あわせて、4年ぶりにご来賓のみなさまをお迎えし、卒業生の門出の場を見届けていただけますこと、本校としてたいへんうれしく、高いところからではございますが、厚く御礼申し上げます。

さて、卒業生のみなさん、みなさんの義務教育9年間を振り返ってみると、その転機が、小学校6年生になるときにおとずれました。みなさんは、小学校で5年間、それぞれが成長し、いよいよ6年生、小学校のリーダーとして活躍を期待されたところ、突然のコロナ禍によって、抱いていたあこがれや、楽しみにしていた体験、仲間とのふれあいなどを絶たれてしまいました。「三密回避」「ソーシャルディスタンス」「マスク生活」「感染者の人数」といった言葉が毎日飛び交い、学校でも「消毒」「黙食」など、あらゆる活動に制限がかかりました。「第何波」と呼ばれた感染拡大期には、学校に登校することすらままならず、「臨時休業」「分散登校」といった措置がとられました。

私も、故・安倍元首相が、卒業期を目前にして、全国の学校の休業を発表した報道を中学校の職員室で見て、その場にいた先生たちとともに、何とも言えない虚脱感、無力感におそわれ、「いったい子どもたちはどうなるのか」と怒りにも似た大きな不安を覚えました。

コロナ禍のうちにみなさんは小学校を卒業しました。中学生になっても状況は変わらず、それまで先輩たちが中学校で経験してきたさまざまなことが取りやめとなり、「もっといろいろやりたかったのに」と残念に思うことも一度や二度ではなかったのではないでしょうか。

みなさんが大きく成長する小学生から中学生の時期に、このように抑圧された状況が続いてしまったことは、残念でなりません。

しかし、昨年4月、3年生としての始業式を迎えたみなさんは、落ち着いて、立派な態度で臨んでいました。体育館に集まる、という経験もしばらくなかったため、戸惑いもあったと思いますが、中川中学校に来てみなさんの前に立った私は、マスク越しに見える、みなさんのまっすぐなまなざしに、頼もしさを感じました。

今ここにいる中川中生は、家族や地域、学校に育まれ、コロナ禍を皆で協力して耐えしのぎました。そして、みなさんは、静かに、しかし、確かに、脈々と成長を続け、穏やかに、けれども粘り強く生きていく、そんな力を身に付けてきたのだと思います。

みなさんが中学2年生のとき、国語の授業で太宰治の「走れメロス」を扱ったと思います。こんな一節があったことを覚えていますか。

「ふと耳に、せんせん、水の流れる音が聞えた。そっと頭をもたげ、息を呑んで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の裂目からこんこんと、何か小さく囁きながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬って、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。」

濁流や山賊の襲撃で体力を失い、疲労困憊で倒れたメロス、いっそ悪徳者として生き延びてやろうかと悪心を抱きかけたメロス、そのメロスを救ったのは、一くちの湧き水でした。この泉の水が、何かの象徴だとしたらそれは何でしょうか。みなさんの脳裏にも「新しい夢」「希望」「再挑戦」「あきらめない心」といった言葉が浮かぶのではないでしょうか。確かに、メロスにとって、このひと口の水は、彼を再び信実に向かって突き動かす、推進力になりました。しかし、このとき、この水を、誰が飲んでも同じように回復し、ふたたび走り出せたと思いますか。

私はそうは思いません。このひと口の水でもう一度立ち上がれたのは、やはりメロスだからなのではないでしょうか。メロスが再度、走り出すことができた原動力は、メロス自身ではないかと思うのです。

メロスは割と単純な男として描かれていますが、それでも、生き抜く力は抜群です。また、自分の行動で人の心を動かすことのできる人間です。そういう意味で、メロスは大きな人だと、私は思います。

昨年5月に新型コロナ感染症は5類に移行し、みなさんも私たちもふたたび走り始めました。中川中では、体育祭、修学旅行、文化祭などの行事や部活動など、生徒たちが関わり合い、共に目的や目標に向かって取り組む活動がふたたび盛んに実施できるようになりました。今振り返ってみても、それぞれの活動を、みなさん自身の力で実現し、共に楽しみ、盛り上げ、意義ある活動にしている姿、輝かしい姿が目に浮かびます。そうした姿を見ることができた私たちも、興奮と大きな喜びを感じました。

こうした活動の一つひとつが、泉の湧き水だとしたら、みなさんは一人ひとりが、ふたたび立ち上がり、走り出したメロスです。

先日、本校元職員の大出真理さんを講師にお招きし、「いのちの授業」を行いました。授業の振返りで、みなさんは、自分が母親のおなかの中でどのように成長し、生まれてきたかをあらためて知り、家族や周りの人々の愛情に育まれて成長してきたことへの感謝の気持ちをつづっていました。そのように育ってきたみなさんには、逆境にあっても、みなで協力し、粘り強く乗り越えることの大切さを実感し、自分自身がそうすることのできる力を身に付けてきたことを誇りに思ってほしいと思います。

これからのみなさんに必要なことは、義務教育9年間で経験できなかったことも含めて、いろいろなことを見たり聞いたり、動いたり考えたり、発表したり表現したり、毎日を自ら生きていくということだと思います。

みなさんが進む道には、それらを実現できるだけの時間と機会がたくさんあるはずです。あせらず、しかし着実に、何回転んでも、何度でも立ち上がりふたたび走り出せる人、「夢をもって挑戦し続ける」人であってください。

コロナ禍と入れ替わるように、世界では、それぞれの言い分を掲げて戦い、傷つけ合う事態が起きています。これまでの世界を作って来た大人たちが、それをまだ解決できていません。

本来、幸せとは、だれかの不幸のうえに成り立つものではありませんし、そうあってはならないものです。しかし、学校の子どもの社会でも、それは「いじめ」という形で存在します。だれかをいじめることで楽しみを得る、そんなことをしていてもだれも

幸せにはなれないし、だれかを幸せにすることも、自分が誇りをもって幸せな人生を歩むこともできません。伝統ある中川中の卒業生のみなさんにはそんな人生を歩んでほしくありません。

今こそ、ふたたび「信頼と共感」の言葉を胸に灯してください。これからみなさんが生きていく広い世界で、異なる文化、人種、主義主張の違いがあっても、自分も皆も生まれてきた喜びを感じることのできる、幸せを実現できる、そんな社会、世界を形成していく一員になってください。

そんな未来を、みなさんに託したいと思います。

最後になりましたが、あらためて、ご臨席の保護者のみなさま、ご来賓のみなさまに、日ごろ、本校の教育活動にご理解とご協力をたまわり、支えていただいていることに感謝申し上げます。今後とも、卒業していく生徒たちと中川中学校を見守り、ご支援いただきますようお願い申し上げ、簡単ではございますが、式辞といたします。

令和六年三月十二日

横浜市立中川中学校　校長　増田友昭